

# 『十勝型』地域包括ケアを目指して ～新たな医療・介護連携、4年間の歩みとこれから～

十勝連携の会  
笠松 信幸 幹事  
(かさまつケアオフィス  
合同会社代表)



## ③ 活動の転機

十勝連携の会は、年に2～3回の研修会(情報交換や事例検討など)をメインに活動してきました。会の運営は幹事会が中心です。研修の企画、講師への折衝、会場予約、チラシ作成、参加申し込み受付・名簿化、当日資料印刷製本など、あらゆる準備を幹事会メンバーが仕事のあとに集まってボランティアで進めています。これは今も変わりません。

結成当初の幹事会は、第1回研修会の呼びかけメンバー12人がそのまま幹事になったのですが、そこに新たなメンバーが2人加わりました。

1人は帯広で訪問診療を進めていたY医師、もう1人は道立帯広保健所の主任保健師Kさんです。2人の参加がその後の十勝連携の会に大きな変化をもたらすことになりました。

### ⌘ホスピス在宅ケア研究会 全国大会inとかち⌘

Y医師は、本州の県立がんセンターから帯広市内のクリニックに移り、末期がんの在宅診療を精力的に進めていました。日本ホスピス・在宅ケア研究会の理事として著名な医師でもありました。

ある日の幹事会でY医師から「今度、研究会の全国大会を帯広で開くことになって、自分が大会長を務めるので手伝ってくれませんか」と提案がありました。研究会は医師やコメディカル、患者団体も参加するフランクな集まりだが、開催には2年くらい前から準備が必要なこと、できればシンポジウムを1つ担当してもらえると助かる、という提案でした。

初めて聞く話でしたが、「きっと良い勉強の機会になるだろう」と幹事の誰もが気楽に考えて、2011年3月、第1回目の実行委員会に出ると、実際の大会は全国から数千人規模で医療関係者、研究者、患者会の方々などが集結し、研究・実践の成果を持ち寄って意見交換する学術的な大会だったのです。「大変なことを引き受けてしまった」というのが正直な気持ちでした。



十勝連携の会メンバーに与えられたミッションは、大会1日目の午後、2時間30分のシンポジウムを主催すること、併せて、参加券やTシャツ販売、協賛広告・展示の募集といった裏方の準備活動も分担しました。

でもこの時点では、大会まで1年半ということもあり、メンバーにはまだ切迫感はありませんでした。「まあ何とかかなるだろう」「いざとなればY先生が良いアイデアをくれるに違いない」、そう思っていました。

Y医師は、十勝連携の会第2回研修会(10年11月)のパネルディスカッションで在宅診療医の立場から、病院を退院し在宅に戻る際の連携の在り方を提言いただいたり、第3回研修会(11年2月)では事例検討会で症例報告してくださいなど、常に会の活動を牽引してくださいました。ところが、Y医師はこの年春に入院され、11月には末期がんのため帰らぬ人となったのです。

全国大会を成功させるというY医師との約束は、私たちににとって遺言と同じ意味を持ちました。「天国から見守ってくれるY先生に恥ずかしくないシンポジウムにしよう」。幹事会メンバーの気持ちが一つになり会議が繰り返されました。

### ⌘帯広・十勝の課題は 全国の課題でもある⌘

12年9月、第20回日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会の1日目、私たちはシンポジウム「家で暮らしたいを支える連携～医療・介護・福祉から～」を開催しました。プログラム抄録集に載せた紹介文(下記)が、その時の私たちの問題意識であり、実践への決意宣言です。

私たちが十勝ですすめている在宅ケアは特別なものではありません。地域の実情の中、試行錯誤しながらすすめている実践です。それだけに、わが国の様々な地域にあてはま

る共通項が見いだせるように思えます。

このシンポジウムでは、広大な十勝の大地＝「小都市＋農山村地域」で展開されている、私たちの日々の実践をモチーフに、超高齢社会の地域医療・介護・福祉、安心して暮らし続けられる地域づくりの方向性を、皆さんとご一緒に考えたいと思います。

6人のシンポジストが自らの実践と課題を発表しました。在宅診療医師、訪問看護師、ケアマネ、医療ソーシャルワーカー、訪問リハビリ職、訪問介護職、それぞれがこれからの展開に思いを込めた発言でした。この時の思いが、いまま十勝連携の会のバックボーンになっています。



シンポジウムの様子

### ⌘幹事会のルール⌘

今は亡きY医師が残して下さったルールがあります。「幹事会では職種や立場に関係なく、みんなが考えたことを自由に話そう」というルールです。

4年前の会発足の時、Y医師を幹事会代表に推す意見がありましたが、ご本人が「この会は連携が目的の会だから、医師の自分が代表になると、反対意見が言いにくい雰囲気になる。みんなが自由に意見を出し合える会にしよう」と固辞されたエピソードがあります。

いま、結成から4年たち幹事会メンバーは24人に増えました。医師、歯科医師、薬剤師、保健師、看護師、リハビリ職、ケアマネ、介護福祉士と職種は様々、社会的な立場も様々ですが、いまでも幹事会では自由に発言するルールが守られています。

※ ※ ※

今回は、この年のもう一つの大きな転機となった「道の医療連携推進事業実施団体指定」についてお話しします。